

MONTHLY MAGAZINE OF SHOP DESIGN & INTERIOR DESIGN

商店建築

1

SHOTENKENCHIKU 2009 January Vol.54 No.1



新年号特別アンケート企画
デザイナーが選ぶ
お気に入りホテル&旅館

FEATURE ARTICLE
カフェ&レストラン

SPECIAL FEATURE
プロダクトデザイン

REPORT
アート&デザイン展3題

007 Katsuya Iwamoto
008 Toshihiro Ehara
009 Mayumi Ehara

010 Noriyuki Otsuka
011 Atsuko Oku
012 Daiki Ozaki

007-012

010

大塚則幸

(大塚ノリユキデザイン事務所)

MY FAVORITE HOTELS BEST 3

- 1 LES TROIS ROIS (スイス・バーゼル)
- 2 Locanda Antica Solferino (ミラノ)
- 3 Hotel la Manufacture (パリ)

番外 民宿はまべや(福井)

おおつか・のりゆき

1960年福井県生まれ。主な仕事:「ブティック ルシェルブルー洗谷店」(08年4月号)、「ブティック スタニングルアー」(05年2月号)ほか

1

5つ星ホテルは数あれど、このホテルは、五つ星+王冠マークが付きます。部屋数が限られたヘリテージ建築で運営するこのホテルは、以前天皇家も宿泊された由緒あるホテルです。数年前にリノベーションされたゲストルームは息をのむ美しさ。接客も完璧でゲストを大事にする。また併設のレストランはスイスでも高名で、ディナーは3時間以上掛けて。必ず正装で。

2

Locandaとはイタリア語で「はたごや」。二つ星ですがとても人気のあるホテルでなかなか予約が取れない。レストランなど付帯設備はないけれど、これはゲストによってはメリットなのでは。ホテル近くにアパート

メントタイプのゲストルームもあり、キッチンが付いているので和みます。サロネシーズンでも宿泊料金は通常のラックレート。ちなみに隣接するRistorante Solferino (別経営ですが)は、味に定評あり。

3

ヨーロッパに行く場合、シャルルドゴール空港をハブにしており、パリで必ず宿泊する三つ星ホテル。海外のホテルでは四つ星には泊まるな、と言われるますが、それは団体指定ホテルが多く、レセプションロビーは終日ごった返していて落ち着かないから。その点、ここは落ち着いており、「パリに来たんだなあ」と感じさせるチャーミングなホテル。近所に気さくなレストランやパリで一番おいしいと言われるパン屋もあります。

番外編

「はまべや」は、木造モルタル2階建て。6畳和室の部屋は、奇麗とは言えない。しかし夕食は地元の魚介をふんだんに使った豪華な料理で、美味しさは太鼓判。田舎の実家に戻ったような安心感。デザインの対局に位置する宿泊施設ですが、秀でたものを一つ持つことの価値を感じます。

今後のホテルについて

今後、例えば、パリのパリらしいブチホテルや日本の小振りな和室部屋旅館など、地元の空気感を体験できるような良い意味での“ナショナルイズム”を提案できるホテル&旅館が求められると思います。

011

奥 昌子

(プラスチック)

MY FAVORITE HOTELS BEST 3

- 1 リッツ カールトン大阪(大阪)
- 2 パークハイアット東京(西新宿)
- 3 ザ・オリエンタル・バンコク(バンコク)

おく・あつこ

岡山県生まれ。主な仕事:「ヘルデンヘルト」(08年4月号)、「ムービックス 柏の葉」(07年6月号)ほか

1

自分のつくるデザインとは対極にあるホテルですがクラシックでありながらモダンで、しっかりとつくり込んでいると

2

とても良い気分になります。またパリのライブを聞きながら過ごす夜も快適です。

3

デザインはシンプルですが、細部にわたるちょっとした設えやこだわりをうれしく感じます。リネン類、バスルームやクローゼットの使い心地も気に入っています。レストランや

バー、ペーカリー等も充実していてリラックスできる居心地の良いホテルだと思います。

3

さりげなくて、心のごもったサービスだと思います。スパまでの移動手段がボートなのは驚きましたが異国情緒が楽しめます。食事も美味しく旅先でゆっくりとくつろぐ事ができる最高のホテルです。

今後のホテルについて

私の場合ホテルは旅というよりも出張、仕事で使う事が多く、1度限りの利用になってしまう事がほとんど

です。そのため各地域のホテルをインターネットで探す事になります。その際にこだわっている事は、ベッドの広さと寝心地、コンフォーターカバーの色は白、掛け布団全体が白いカバーでくるまれているという点です。もしも私がホテルをデザインするならば、真っ白いゲストルームをつくりたいです。床も壁もバスルームも、もちろんリネン類も真っ白。白い材料と間接光だけで構成したミニマルな空間を提案したいですね。

012

尾崎大樹

(ミューブランニング&オペレーターズ)

MY FAVORITE HOTELS BEST 3

- 1 儀屋(京都)
- 2 アマンダリ(バリ島)
- 3 Luise Hotel + Kustlerheim(ベルリン)

おざき・だいき

1975年鹿児島県生まれ。主な仕事:「中国料理店 TUNG LOK SIGNATURES THE CENTRAL」(08年8月号)、「タイ料理 ジム トンプソンズ テーブル タイランド」(08年2月号)ほか

1

呉服問屋「儀屋」京都支店支配人のもとでな上手が買われ、石州藩士の定宿になったことに由来する宿で、もてなしに対するこだわりが半端ではない。「儀屋は職人が支えている」と聞いたが、宿して肌で感じる事ができた。設えの道具やもてなしの道具、すべての「もの」にもてなしへの理由が感じられる。この宿は設計という職につく私にとって、程よい緊張感を楽しめる場所である。

2

このホテルを筆頭に、アマンリゾートはすっかり有名になり、世界各国に「アマンジャッキー」なるアマンに魅了された常連客がいる。現在、

私はインドネシアでの仕事を受けているが、アマン常連のオーナーとバリにある「dari」[nusa] [kila] に宿泊した際の「dari」での経験が忘れられない。バリウブド、深谷の風景が美しい森林地帯の田舎町。リゾート内で地元の女性達がバリ舞踊練習をしていた。伝統的な器楽演奏「ガムラン」の音色に合わせ、宿泊客も一緒に神秘的な空気に浸って踊っていた。

3

ベルリンの森園外記念館近くにあるアーティストホテル。昨年ベルリンを訪れた際友人の勧めで宿泊した。各部屋それぞれ個性豊かな地元のアーティストがインテリアを設えるユニ

ークなホテル。私が泊まったのはアクションアーティスト、トーマス・バウムゲルテルの部屋であった。地元ではアバンギャルドな発想で有名な人物のようで、ギャラリーにも案内された。個性的なアーティストが滞在する場所を設え意匠するという発想が天晴れである。

今後のホテルについて

私が好きになるホテルは、「強い武器を持つ宿」。安らぎを求めたり、驚きを求めたり、空間を楽しんだり、人との癒しを楽しんだり。ごく自然にその時間をその場所で想いを残すことができる。とてもシンプルなことだが、極めていてからこそ人の心に残るのだと思う。



高品質の古材を 現代空間に再生する 信州古材

豪雪で知られる信州北部で100年以上も古民家を支え続けた信州古材は目がつまり、太いのが特徴で、厚手で温かみのある空間演出に最適。山翠舎夢蔵では信州を中心に国産良質古材の在庫800本余りを取り揃えている。材料の加工にも対応しており、好みのサイズ、形状にカットした製品を納入できる。自社内では、テーブル等の家具や什器も製作している。長野本社にはショールームを併設。Web上では古材1本毎に製品画像が掲載されており遠隔地でも詳細を確認して購入することができる。写真は床、柱からテーブル、カウンター、ポトル受けまで古材を用いた神奈川県横浜市の炭火焼店の施工例。

<http://www.kozai.jp/>

◆山翠舎夢蔵 tel.026-222-2211

(資料請求番号794)



経年変化を多彩に表現する エイジング特殊塗装

多様なスタイルのアートを提案するアートライフ。写真は兩社の古民家風エイジング塗装を施した例。白のモルタル下地に、上から燻互や石調のペイントを施し、時代がかった凹凸のある質感を演出した。ビニールクロスや石膏ボードでも漆喰の雰囲気は出せるので、シーンを選ばず、塗装のバリエーションも幅広い。もちろん現場に合わせてポイントになる装飾 (FRP造形・ロートアイアン・ステンドグラスなど) も施工可能。他にも壁画やトリックアート・立体オブジェの企画制作を行い、デザインの段階からさまざまなアイデアを提供している。

◆アートライフ tel.078-652-5515 [資料請求番号795]

Designer's Interview about DECORATION



フェイク素材もデザインによって新しい価値を生む

大塚則幸 (大塚ノリユキデザイン事務所)

タイラー一つとっても、毎年、伊・ポローニヤで開催される世界最大の見本市「チェルサイエ」に足を運び、オリジナルデザインのモザイクタイルを発表するなど、既製品から選ぶ発想ではなく、自ら装飾マテリアルの開発にも取り組む大塚則幸さんに、空間の“装飾”素材というテーマで話を聞いた。

——かつて、オリジナルのモザイクタイルを手掛けたきっかけから聞かせてください。以前からタイルには興味を持っており、ショップのデザインに特注品を使ったりしていました。2004年に、大阪・心斎橋のブティック「スタンディングルアー」(05年2月号掲載)の壁面にオリジナルパターンのモザイクタイルを用いました。パターンを考えようとしたきっかけは、自分で使いたいのがなかったことと、コンピューターにより、自分の頭の中にある図案のイメージをすぐに目に見える形に表せるようになったことも一因です。その店舗を目にしたメーカーの方から連絡をもらい、モザイクタイルの商品化と、他のデザイナーを起用したシリーズの企画に携わることになりました。発売してから2年経ちましたが、2年連続でシリーズ内の売り上げトップと聞いています。

—— タイル以外に、気になっている素材はありますか。例えば、人工大理石はもともと大理石の代用品としてつくられた、いわばメフェイクモですが、年月を重ねていく中で、それ以上のものに進化してきたと思います。つまり、デザインによって、別のものになったり、本物を越えるような使い方が可能になる。そういう使い方をしてみたいという

考えていますし、モノの価値を変えるようなことは、デザイナーにしかできない仕事だと思っています。造花なども、最近はリアルさを追及したものが多く出回っていますが、リアリティーを追求するのではなく、まったく別のテクスチャーを与えたりすることで、新しい花の表現ができる気もしています。—— 今後、やってみたい“装飾”的なデザインというのは、あるでしょうか。僕のデザインテーマとして、「無のようで有であり、混在のようで透明である」ということがあるのですが、オーナメントを多用したゴテゴテと飾りたてるようなデザインはあまりしたことがありませんし、これからはもしないでしょう。しかし、モーディングをモチーフとした新しいアイデアがあり、近々お見せできるかもしれません。日本では装飾というと、すぐに飾りたてる“華飾”のイメージが連想されると思うのですが、それだけが装飾ではないと思います。最近レジデンスの仕事でデザインした和室は、色のないシンプルな空間ですが、こうしたデザインも、そぎ落とした装飾表現の一つであり、華やかに見えないから装飾がないのではなく、デザインをすること自体が空間の装飾であると考えています。